



主な内容

新年のご挨拶

特集

希望郷いわて国体、いわて大会における
本学学生の活動報告

フリーページ

すこやかスポット医学講座No.74
「病理標本の作製過程と注意点」

表紙写真：小川理事長（左）と祖父江学長（右）

（2016.12.7 本学1号館螺旋階段にて 医用画像情報センター撮影）



新年のご挨拶

理事長 小川 彰

新年あけましておめでとうございます。

皆様にはご健勝で新年を迎えられました事、心よりお慶び申し上げます。

今年は、本学の源となった私立岩手病院、医学講習所、産婆看護婦養成所を開設した明治30年から数えて120年目にあたります。現在、全国に医学部を擁する大学は81校ありますが、明治30年当時の医育機関は官立9校、私立4校のわずか13校でした。私立4校のうち現在なお存続しているのは、本学と東京慈恵会医科大学だけです。

地方にあって、120年の歴史を繋いできた私学は本学のみです。本学存続には、幾多の苦難や危機的状況がありました。各時代で最大限の努力をしてきたからこそ、現代に本学が存在しているのです。先人の御労苦には頭が下がる思いです。

今年は開設日である4月20日に創立120周年記念式典を開催、また、記念事業の核ともなる1,000床の新附属病院が4月に着工されます。運用開始は平成31年秋を予定しています。また、創立者三田俊次郎は開設当初から産婆看護婦養成所を併設しました。この意味

は、医師のみを育成しても地域医療の改善はない。看護婦、産婆（当時）の養成が必要との考えからです。チーム医療の概念すらなかった明治の時代にこの考えで学校を創った先見性に改めて敬意を表します。今年からは念願の4年制看護学部が発足し、歴史に翻弄され中断していた看護・助産・保健師の養成が始まり、医・歯・薬・看護の医系総合大学が完成します。

この様に、本邦の医育機関の中で比類のない歴史と伝統を持つ本学は、教育・診療・研究すべての面で本邦のトップクラスに位置しなければなりません。教職員一人ひとりが本学の歴史と理念を正しく認識し自信をもって本学発展に寄与しなければ先人の大変な御労苦を無にすることになります。また、後輩や将来の国民医療のために、岩手医科大学を発展させてゆく責務を負っていることを自覚して頂きたいと思います。そして今年を本学の「更なる発展元年」と位置付け、皆で将来のための新たなスタートラインに立ち今後一人ひとりが最大限の努力をすることを誓って頂く事をお願いし、年頭の御挨拶と致します。

学 長 祖父江 憲治

明けましておめでとうございます。皆様方におかれましては、御健勝に新年を迎えられましたこととお慶び申し上げます。

年明けとともに、本年は岩手医科大学にとりまして記念すべき一年となります。本学創立120年の節目にあたり、4月20日には全学を挙げて記念式典の開催を予定しております。次に、これ迄準備を進めてまいりました矢巾新病院の建設が、本年よりいよいよ本格的に開始されます。さらに医学部、歯学部、薬学部に続き、4月より悲願でありました看護学部の新入生を迎えることになり、医・歯・薬・看護4学部体制による名実ともに医療系総合大学としてスタート致します。

建学120年という長い歴史を刻んできた本学ではありますが、ここには数多くの先人から現教職員の皆様方に至る情熱と努力に支えられて今日に至ったものであります。現在、岩手医科大学創立120周年記念誌を作製中ですが、建学から今日に至る先人、諸先輩と皆様方の血と汗と涙による苦節120年の歴史の集約であり、歴史の重さを痛感致します。

矢巾新病院は1,000床規模の世界屈指の大病院として、平成31年9月に開院を予定しています。その後に、内丸メディカルセンター建設に入ります。この矢巾新病院と内丸メディカルセンターは、周辺医師会・歯科医師会や関連病院の先

生方と連携した病診・病病連携により従来以上に地域医療に邁進するとともに、先進医療基地として岩手全県のみならず、北東北、さらには東北の中核拠点病院として貢献する重大な使命を担っております。

矢巾新病院と内丸メディカルセンターという大診療施設であり実習・研修病院と、矢巾キャンパス内にすでに建設されている医・歯・薬・看護4学部（看護学部は新たに設置中）の教育・研究施設が充実することになります。ここで同時に進行させなければならないのは人造りです。診療・教育・研究施設を最大限に駆使して、次世代医療人となる学生教育と専門医療人としての卒後教育を行い、医療イノベーションを振興し、大学の特色を最大限に生かした魅力ある岩手医科大学を情報発信し、本学卒業生のみならず全国から多くの医療人を受け入れて、より多くの高度専門医療人を養成していかなければなりません。今後は、岩手から東北のみならず、日本全国さらに世界に雄飛する医療人造り（人造り）が重要であります。

岩手医科大学の教職員の皆様方が一致一丸となり、新生岩手医科大学のさらなる発展に向けてご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。



2017年、岩手医科大学は創立120周年を迎えます。
誠のあゆみ、未来へつなぐ

希望郷いわて国体、いわて大会における本学学生の活動報告

昭和40年(1970)以来、46年ぶりに岩手県で開催された「希望郷いわて国体」。本大会と冬季大会のすべての競技を開催する完全国体となりました。

平成28年10月1日から11日まで開催された「希望郷いわて国体」で、薬学部の学生たちが岩手県薬剤師会の「アンチドーピング」の啓発活動に参加。競技場を訪れた市民らにアンケート調査を行いながら、アンチドーピングの大切さを訴えました。また、本大会の後には、障がいのある方たちが参加する「希望郷いわて大会」も行われ、医学部の学生たちがサポートボランティアとして活動しました。

今号では、岩手医科大学父兄会報「啖啄」に掲載された本学学生の活動記事を、本誌においても共同企画として紹介いたします。

1 アンチドーピングを間近に学んだ「希望郷いわて国体」

10月に開催された「希望郷いわて国体」において、薬学部の学生有志が活躍しました。ひとつは、岩手県薬剤師会が主催するアンチドーピングの啓発活動への参加です。3年生から5年生の学生有志は、4日間にわたって盛岡・花巻・釜石の3市の競技場に出向き、観客や選手、試合の補助員などにドーピングに関するアンケートを実施し、市販の風邪薬などの服用により、身近に起こりうるドーピングの危険性などについて説明しました。アンケートに答えてくれた人には、いわて国体のマスコットが描かれた缶バッジなどを笑顔で手渡しました。

そして、もうひとつの活動がドーピング検査補助でした。学生たちは、検査の対象となったアスリートに、その旨を通告し、エスコートする「シャペロン」という重要な役割を担いました。

薬学部では第1期生から、さまざまな競技会に関わってきたとのこと。活動に参加した学生は、アンチドーピングへの関心が高まり、その活動に携わるスポーツファーマシスト(*)の資格を取得した卒業生も少なくないそうです。今回の参加者の中からもスポーツファーマシストが生まれ、活躍の場を広げていくことでしょう。



自由科目「アンチドーピング」：講義と活動 薬学部創剤学講座 教授 佐塚 泰之

スポーツは、トップアスリートだけでなく、娯楽として、また、健康維持や疾病予防の観点から幅広い年代で親しまれています。しかしながら、よい記録を追求するあまりに、くすりに頼るドーピングが問題となっており、先般のリオオリンピックでも、多くの話題を提供することとなってしまいました。一方、これに対するアンチドーピングの活動は世界的に展開されており、オリンピック、各競技の世界大会だけでなく、国内でも国民体育大会を始めとする様々な競技会でドーピング検査が行われています。しかしながら、スポーツ選手や一般のスポーツ愛好家はくすりに関する知識が乏しく、特に日本においては日常的に服用する医薬品によるうっかりドーピングが起きているのが現状です。そこで、くすりの専門家である薬剤師が正確な情報をスポーツ選手に与える必要があり、日本アンチドーピング機構は、薬剤師を対象に公認スポーツファーマシストを認定しています。

本学薬学部では、薬剤師を目指す薬学部生の立場からスポーツと薬の関わりを学び考えることが必要であることより、自由科目「アンチドーピング」(講義責任者:佐塚、分担者:杉山育美助教(いずれもスポーツファーマシスト))を開講しております。

本講義は、スポーツ領域への薬剤師の介入が必要であることをアンチドーピング、特にうっかりドーピングの観点から学ぶとともに



に、アンチドーピング活動の実際とドーピング検査について知ることを主体としております。すなわち、薬学生のうちからスポーツ領域におけるドーピング禁止物質に関する詳細な知識を教授することよりも、大きな方向性と役割を明示しモチベーションを持たせることを講義目的としており、これにより、薬剤師となった後のスポーツファーマシスト取得というチャレンジが可能となり、その使命を果たせるものと思われます。

講義は、4～6年生を対象に開講されており、スポーツファーマシストの概要、スポーツ薬理学を講義するとともにアンチドーピングの実際の活動を説明しております。また、外来講師として卒業生を含むスポーツファーマシストに活動内容を御紹介頂くとともにドーピング検査員に検査の実態を解説頂きました。さらに、以上の知識をもとにアンチドーピングの観点からアスリートである患者の処方せんより処方薬が適切であるか否かをスモールグループディスカッションにて討論し、その実際を学びました。

本年は岩手国体が開催されたことより、本講義の受講者を始めとした何人かの学生が盛岡市、花巻市、釜石市でのアンチドーピング活動に参加するとともにドーピング検査の補助者として活動しました。国内最大のスポーツ大会である国体の第一線で活動できたことにより、体験した学生は各自の中に大きな財産を得たことと思います。

フォトアルバム



● スポーツファーマシストの定義 ●

公認スポーツファーマシストは、最新のドーピング防止規則に関する正確な情報・知識を持ち、競技者を含めたスポーツ愛好家などに対し、薬の正しい使い方の指導、薬に関する健康教育などの普及・啓発を行い、スポーツにおけるドーピングを防止することを主な活動とする。公益財団法人 日本アンチ・ドーピング機構より認定された資格制度。

(スポーツファーマシスト HP より)

フォトアルバム



参加した学生たちの声

参加の理由は？

「国体が岩手で行われるという、希有なタイミングで関われる。良い機会だと思って参加した。」

啓発活動はどうだった？

「自分もアンチドーピングについては、テレビのニュースで知る程度の知識しかなかった。市民の人たちにアンケートの中のクイズを出すと、やはり正答率が低かった。」

「一度、アンケートに答えたという方に、『この風邪薬に禁止物質は、入っていますか』と質問された。こういう活動を通じて、関心が高まると実感した。」

「啓発活動で一緒にいた薬剤師の先生方を見てみると、来場者の質問に的確に答え、分かりやすく説明していた。そのコミュニケーションの様子に、自分はまだまだだなと感じた。」

「憧れの選手を見に来たという女の子たちがいました。その子たちが将来、アスリートになるかもしれない。アンチドーピングを知ってもらうことは大切だと思った。」

ドーピング検査の現場は？

「検査の対象が勝った選手とは限らないので、声をかけるタイミングが難しかった。」

「採尿が終わるまでが仕事だったので、3時間くらい待つこともあり大変だった。」

「選手の一生に関わることなので、責任重大。現場に立ち会い、その重みを知った。」

経験をどう活かす？

「薬剤師になってからもスポーツに関わりたい。この活動を通じて、将来はスポーツファーマシストになりたいと思った。」

「スポーツファーマシストになって、選手だけでなく、スポーツに関わるすべての人の役に立ちたい。」

「来場者に突然アンケートをお願いするので、コミュニケーション能力が必要だと実感。座学では分からないことを学べた。」

「座学では分からないことを体感し、知識欲が高まった。」

希望郷いわて国体2016

来場者と交流しながらアンチ・ドーピングの啓発活動を行う岩手医大薬学部学生（左）



危険ドーピング「ノ」

競技会場 岩手医大生が啓発

岩手医大の薬学部有志は6日までの4日間、岩手国体の競技会場でアンチ・ドーピングの啓発活動を行っている。県薬剤師協会主催の取り組みに薬剤師などを

目指す学生が協力、ドーピングの危険性を広く呼び掛けた。5日は花巻市総合体育館の休憩スペースで実施。同学部の3～5年生5人が、選手や観客にドーピングに関するアンケートを実施したほか、応援に訪れた市内

の小学生に身近に潜むドーピングの存在などを説明した。アンケートに協力した人には缶バッジやシールをプレゼントし、和気あいあいと会話を弾ませた。同学部3年の中野歩美さんは「地元国体で啓発活動に携わることができてうれしい。ドーピングの知識はまだまだ普及が必要で、今日の活動が少しでも役立つほしい」と願った。

2 医学部1年生20人が「希望郷いわて大会」をサポート

いわて国体に続いて10月22日から24日まで行われた「希望郷いわて大会」において、「ボランティア活動論（選択必修）」を履修する医学部1年生20人が、サポートボランティアとして活動。盛岡南公園球技場いわぎんスタジアムで、4日間にわたって開催されたサッカー競技（知的障害者）の運営を支えました。

競技に参加したのは、岩手県・東京都・静岡県・島根県・沖縄県・札幌市・大阪府の7チーム。学生たちは、それぞれの担当チームに張り付き、出迎え、練習のサポート、試合の記録、荷物の管理など、つきっきりでお世話をしていました。また、事前に各チームを応援するフラッグを作り、試合中はそれを掲げて応援しました。

一緒に過ごすうちに、選手団とのコミュニケーションもスムーズに。親しく会話を交わす様子も見られました。かいがいしく働く学生たちに対し、大会の運営スタッフからは「よく働いてくれて、本当に助かっています」との声が聞かれました。

大会が次に岩手に巡ってくるのは、おそらく47年後。この得がたい経験は、きっと学生たちの今後に役立つことでしょう。

フォトアルバム





平成28年度クラブ活動報告会が行われました

12月5日(月)、矢巾キャンパス大堀記念講堂において、平成28年度クラブ活動報告会が行われ、祖父江学長をはじめ、各学部の学生部長、各クラブの部長及び学生が出席しました。

報告会では、総務局・体育局・文化局各代表の学生から、今年の活動報告と来年の行事予定や抱負が述べられました。続いて、今年行われた各種体育大会で優秀な成績を収めた団体、学友会活動に貢献した文化部及び前学友会役員へ表彰が行われました。



安全対策講習会が行われました

安全対策講習会が、12月21日(水)から11回(録画映像による開催を含む)にわたって歯学部4階講堂で行われ、総勢約1,100名の職員が参加しました。

講習会では、北里大学病院診療情報管理士の荒井康夫先生(写真)を講師に迎えて「インフォームド・コンセントに関して医療機関に求められた対応」と題した講演が行われました。参加者は、インフォームド・コンセントに関わる法令や北里大学病院における取組みについて熱心に聴講し、インフォームド・コンセントに対する理解を深めました。



西5階A病棟でクリスマス会が行われました

12月22日(木)西5階病棟のプレイルームにおいて、平成28年度のクリスマス会が行われました。

この会は、西5階A病棟に入院している子供たちやその保護者の方々にクリスマス気分を味わって頂けるよう毎年行われています。

始めに青松支援学校の生徒さんによる「ふるさと」「ビリーヴ」が演奏され、生徒さんが一生懸命奏でるメロディに、時折涙を浮かべながら聞き入る方もいました。その後、西5階A病棟スタッフによるクリスマスメドレーの演奏と人気ドラマ「逃げるは恥だが役に立つ」の「恋ダンス」が披露され、会場は温かな空気と笑顔に包まれました。



平成28年度高大連携ウインターセッションが行われました

12月25日(日)、26日(月)の2日間、矢巾キャンパス及び内丸キャンパスにおいて、いわて5大学(岩手大学、岩手県立大学、盛岡大学、富士大学、本学)と岩手県教育委員会が主催する高大連携ウインターセッションが行われました。

ウインターセッションは、高校生が大学に触れる機会を広く提供することで、進路意識の高揚と学力の向上につなげると同時に、高等学校と大学の連携を円滑にし大学の魅力を高めることを目的に、平成15年から行われています。

今年度は、県内の高校生94名が医・歯・薬学部の講義や実習を体験し、最終日には受講生一人ひとりに修了証書が手渡されました。体験後のアンケートでは、「大学で学んでいる内容をその場所で学べる新鮮さと内容に満足しました」といった感想が寄せられました。



全学部共通講義 祖父江 憲治 学長
「大学で何を学ぶのか」



医学部実習
「倒壊家屋から傷病者を救え! ~がれきの下から初療室まで~」



歯学部 口腔保健育成学講座 歯科矯正学分野
佐藤 和朗 教授
「矯正歯科治療 痛いこと 痛くないこと」



薬学部実習
「調剤体験」

平成29年新年祝賀式が行われました

1月4日(水)、創立60周年記念館8階研修室において、平成29年の新年祝賀式が来賓、教職員約200名の出席のもと行われました。

祝賀式では、小川理事長からの年頭のご挨拶の後、ラウンジに場所を移し懇親会が行われました。懇親会では、祖父江学長から乾杯のご発声があり、本学創立120周年という節目の年を迎え、教職員全員が一致団結して本学の更なる発展に向け取り組んでいくことを誓いました。





神原 栄子 看護師・松村 豊 主任診療放射線技師が 文部科学大臣表彰（医学教育等関係業務功労）を受賞しました

本学附属病院看護部の神原 栄子さん（写真右端）と中央放射線部の松村 豊さん（写真左端）は、平成28年度の文部科学大臣表彰（医学教育等関係業務功労）を受賞しました。

この賞は、国立、公立及び私立の大学における医学又は歯学に関する教育・研究若しくは患者さんの診療等に係る補助的業務に関し顕著な功労のあった方々を表彰することにより、関係職員の士気を高揚し、医学又は歯学教育の充実向上を図ることを目的として、昭和49年から実施されています。

神原さんは昭和54年4月に、松村さんは昭和57年4月にそれぞれ採用され、本学における医学教育・研究及び大学病院における患者さんの診療等を支える業務に長年にわたって精励し、本学医療の資質向上に貢献されています。



小川理事長、祖父江学長との記念撮影

第16回障害者スポーツ大会（希望郷いわて大会）における ボランティア活動に対し感謝状が贈呈されました

平成28年10月22日（土）から24日（月）に岩手県で開催された第16回全国障害者スポーツ大会（希望郷いわて大会）において、選手団サポートのボランティア活動に尽力し、「広げよう感動。伝えよう感謝。」のスローガンの実現と大会の成功に大きく寄与したとして、岩手県より感謝状が贈呈されました。

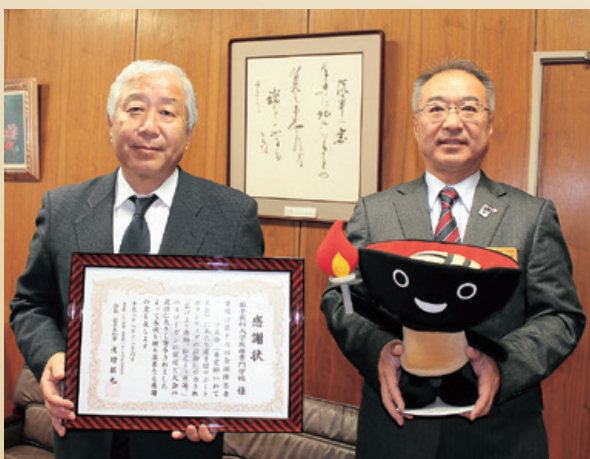
本法人が設置する岩手医科大学、岩手看護短期大学、岩手医科大学医療専門学校それぞれの学生が、つきっきりで各県選手団のサポートや応援を行いました。初めての経験にも関わらず、どの学生も精力的に活動し、選手団、大会関係者からも感謝の言葉を頂きました。



岩手医科大学



岩手看護短期大学



岩手医科大学医療専門学校

シリーズ 職場めぐり

No.107

泌尿器科学講座

泌尿器科学講座は、1966年4月に皮膚科泌尿器科講座から分離独立したことに始まり、昨年で開講50周年を迎えました。現在は総勢12名で診療・教育・研究の3本柱を基軸に講座運営を行っています。

診療は、尿路や生殖器に関係する疾患を対象に、悪性腫瘍や排尿障害をはじめ、尿路結石症や尿路感染症、小児・女性泌尿器疾患、さらには腎疾患および血液浄化療法に至るまで幅広く精力的に取り組んでいます。特に、2013年からは県内でいち早くロボット支援手術を導入し、前立腺癌に対する根治術に加え、昨年からは小径腎癌に対する腎部分切除も開始しました。

また、患者様に還元する研究を発信し医学の発展に寄与すべく、前立腺癌に関する全ゲノム解析を行うと共に、網羅的遺伝子発現情報解析に基づいた抗癌剤の感受性予測法や、新しい治療法としてがんペプチドワクチン療法を開発し、患者様に提供するまでに至っています。

平均年齢の若い講座ですが、若さを活かした機動性や柔軟性を武器に、今後も大学や講座の発展を目指して積極的に活動していきたいと考えています。

(講師 高田 亮)



腫瘍生物学研究部門

医歯薬総合研究所腫瘍生物学研究部門は、難治性悪性腫瘍や希少がんを対象として新規治療法の基礎研究を行っています。発見が遅れ、進行がんになってしまうと極めて予後不良な膵癌、悪性黒色腫、悪性中皮腫などは、まだまだこれといった標準治療が開発されていないのが現状です。製薬会社も患者数の少ないがん種に対しては、多額の資金を投入して新規分子標的治療薬を開発してもなかなか元が取れないので、どうしても後手に回ってしまいます。希少がんに対して挑戦的治療法の開発研究を展開することは、税金を頂いて研究を行っている大学の使命の1つではないかと思えます。

スタッフ3名の小さな所帯ですが、医歯学部から若い7人の大学院生が来ています(写真撮影時、学会、診療で2名不在)。子育て中のお母さんもいます。和気藹々とした雰囲気です。研究に関しては皆様の御指導

をお願いしたいことがたくさんあります。よろしくお願いします。

(特任教授 前沢 千早)



いわてこどもケアセンター

いわてこどもケアセンターは、東日本大震災後、岩手県の委託によって設立されました。酒井明夫センター長、八木淳子副センター長のもと、医師、看護師、精神保健福祉士、社会福祉士、臨床心理士、作業療法士、保育士、事務など総勢24名のスタッフで構成されています。矢巾中央センターでの児童精神科外来の他、週1日は沿岸被災地3か所(宮古・釜石・大船度)の巡回診療を行っています。

震災後5年を経た今、震災だけではなく、不登校、発達障害など様々な問題を抱える子どもたちが受診していますが、当センターでは保護者の了解のもと、学校や地域の福祉機関、小児科などとも連携しながら支援をすすめています。また、子どものPTSDへの専門療法としてTF-CBT(トラウマフォーカスト認知行動療法)の実践・研究や、沿岸被災地での3歳児コホート調査も行い、得

られた知見を岩手県の子どもの心の健康や大規模災害後の中長期支援に役立てることを目指しています。

(主任臨床心理士 三浦 光子)



私は、2016年7月25～29日岐阜大学医学生理学講座において開催された基礎医学系の新しい実習スタイルとしての「基礎統合実習」に参加する機会をいただきました。この実習は、初期研修後の基礎医学系への志望者が激減している現状から、生理学研究者のみならず将来の基礎医学系への人材リクルートの具体的なモデルとして行われ、今年で12回目を迎えます。様々な大学から来た各学年でチームを組んで互いに意見を交わしながら実験を進めていくグループ実習でした。内容は各々のグループに与えられた患者さんの状態や病歴などが書かれた課題から、どのようにしたらその病気を改善できるかを含めた治療などの仮説を立て、その仮説を立証するための実験のプロトコルを一から検討し、その実験結果と仮説とのずれを検証することを、すべて学生自らが考えて行う実習でした。

私は、生理学は、自分の体内で起こっている事象を取り上げていて、とっつきやすく、一度仕組みを理解すれば、すんなりと頭に入ってくるやすい学問だと考えています。今回、私がこの実習に参加しようと決めたきっかけは、座学で学んだばかりの生理学の知識を、実習という手と頭を動かすことを通じて、しっかり自分のものにしたいと強く思ったからです。しかし、実際は本格的に今回のような実験を行ったことがなく、実験用語もほとんど知らない状態での参加だったため、大変不安でした。

実習の2日目から本格的に実験が始まりましたが、まずは実験の道具を揃えるところからのスタートでした。分からないところや疑問に感じたところは、今回の実習に協力をしてくださっている先生方に尋ねるよりも前に、まずは自分たちのグループ内で解決をしようと心がけ、その際に出た最終意見を先生に伝えて、次の工程に進むという形で行いました。先生方はもちろん



後列左から2人目が筆者

答えや正しい結果を知っています。生理学を学んだばかりの私たちがしなくてはならないことは、自分たちの持っている生理学だけの知識に限らずあらゆる知識を終結させ、目の前の仮説を基にして考えた実験を行い、理屈の通った結論を出すことです。すぐに答えを聞いてしまえば、知識は定着しないという事を身をもって体験しました。

生理学という学問が、これから進級し、専門科目をどんどん学んでいく上で、大切な基礎科目となると改めて感じました。基礎科目は、理屈をつけてでも正確に理解し定着させることが大切であると、岩手医科大学での生理学の授業中だけではなく、他の科目の授業の際にも何人もの先生方が繰り返しおっしゃっていました。例えば遠回りのように見えても、その場の暗記で済ませることなく、じっくりと学ぶことは、これから先の学年で専門科目を学ぶ上で、とても近道になると強く身を持って感じた実習でした。

編集委員コーナー No.14 ～木の花会館1階フードコート「このはな」～

今回は木の花会館1階のフードコート「このはな」についてです。以前学生職員食堂が中庭にあって「ホール」と呼ばれていたことを知っている方はどの位いらっしゃるでしょうか。「ホール」のネギラーメンは今より薄めのスープにキムチネギが満載でそのネギが今以上に甘みがあって絶妙でした(週替わり麺で復活しないかと密かに期待しています)。「このはな」で、以前から気になっていたことを伺ってみました。【その1】ラーメンや汁物にたっぷり乗る刻みネギの辛みがないですが何か秘密が?(水にさらすか一晩冷やすという私の予想はハズレ)→午前中に刻んで何もしていません。【その2】そば、うどんのだしが美味しく化学調味料が入っていないようですが?→昆布とかつおだしに醤油を吟味し、従業員の皆さんで研究を重ねて今の味になりました。【その3】バラエティに富んでいる日

替わり弁当やランチ、定食はすべてその日に仕込みをしているのですか?→前日から仕込むこともあり、飽きが来ないように栄養士さんがメニューに工夫を凝らしています。【その4】かき揚げがとてもビッグですが?→「うちの名物です。」カレーやラーメンのスープは「ホール」時代からの味を守り、赤字覚悟でボリュームのある定食やランチを提供して下さっています。

最後に幻のメニューを。日替わりランチがいやしライスの時だけ提供される、ハヤシのルーをかけたオムライス「オムハヤシ」です。すぐ売り切れになる人気メニューですのでチャンスがあったらぜひ味わってみてください(写真はオムハヤシではなくインド風オムライスです)。

(編集委員 佐々木さき子)



理事会報告（11月定例－11月28日開催）

1. 教員の人事について

医学部救急・災害・総合医学講座総合診療医学分野 教授
下沖 収（現 岩手県立千厩病院 病院長）
（発令年月日 割愛の状況による）
統合基礎講座薬理学講座病態制御学分野 教授
小笠原 正人
（前 愛媛大学大学院医学系研究科器官・形態領域薬理学講座 准教授）
（発令年月日 平成29年1月1日）

2. 岩手県高度救命救急センター長の選任について

岩手県高度救命救急センター長
井上 義博（救急・災害・総合医学講座救急医学分野 教授）
（任期 平成28年12月1日から平成31年3月31日まで）

3. 学則の一部改正について

在学年限（第2条第3項）及び別表1（第6条関係：看護学部）、別表2（第30条関係：薬学部前期卒業）を一部改正することを承認

（施行年月日 平成29年4月1日）

4. 平成28年度給与改定及び12月期末勤勉手当等の支給について

5. 矢巾新病院開設許可申請の届出について

矢巾新病院の開設に向けて、来年4月の工事着工、平成31年9月の開院予定で現在準備を進めているが、工事に着手するためには医療法に基づき、岩手県知事宛に病院開設申請書を提出し許可を得る必要があることから、原案どおり届出することについて承認

《岩手医科大学報編集委員》

小川 彰 米澤 裕司
影山 雄太 山尾 寿子
松政 正俊 菊池 初子
齋野 朝幸 佐々木さき子
成田 欣弥 佐々木忠司
佐藤 仁 熊谷 佑子
藤本 康之 畠山 正充
白石 博久 菅原 侑子
藤澤 美穂 武藤千恵子
高橋 慶

編集後記

今号が皆様のお手元に届く頃は寒中の最中。お風邪など召されぬよう、ご自愛いただければと存じます。それでも、冬が終わると看護学部の新入生もあらたに加わり、益々賑やかになることと期待しております。そして、120周年です。岩手医科大学の歴史をたどり、未来をみつめる。今年はそのような年になるのでしょうか。それでは、今年も大学報をよろしく願いいたします。

（編集委員 藤本 康之）

岩手医科大学報 第484号

発行年月日 平成29年1月31日

発行 学校法人岩手医科大学

編集委員長 小川 彰

編集 岩手医科大学報編集委員会

事務局 企画部 企画調整課

盛岡市内丸19-1

TEL. 019-651-5111（内線7023）

FAX. 019-624-1231

E-mail: kikaku@j.iwate-med.ac.jp

印刷 河北印刷株式会社

盛岡市本町通2-8-7

TEL. 019-623-4256

E-mail: office@kahoku-ipm.jp

スポット医学講座

病理診断学講座 助教 杉本 亮



病理標本の作製過程と注意点

今日の日常診療において、確定診断に病理診断は必要不可欠であり、患者さんの治療方針の決定に重要な役割を担っていることは周知の事実である。しかし、病理標本の作製過程や作成に要する時間に関して認識は充分とはいえない。本稿では検体の提出方法を含め標本作製から病理診断医の鏡検（顕微鏡での観察）・報告に至るまでの過程を紹介する。

●検体採取から病理診断依頼まで

病理検体には生検検体と手術検体がある。いずれの検体も固定には10%中性緩衝ホルマリン液が用いられる。検体は時間の経過とともに自己融解が始まる。自己融解し固定状態が不良となった検体は診断に多大なる支障を来す。検体は採取後速やかに固定することが望ましい。時に生理食塩水に浸した状態での検体提出がみられるが、これは診断困難の要因となり得るので絶対にしてはいけないことである（禁忌）。

●病理標本作成の過程

組織の固定時間は検体の大きさにより異なる。生検検体は微小で固定に要する時間は短い。一方、手術検体は胃や腸などの管腔臓器から肝臓などの充実性臓器もあり固定前に割を入れておくことも重要である。これは、ホルマリンの浸透時間が1～2mm/hrであることを考えれば当然の事といえよう。また、骨は脱灰（固くなる要素である石灰分を溶かし柔らかくすること）を要し切り出しまでに相当の時間がかかることも理解すべきである。

提出された手術検体は病理医により切り出しが行われる。切り出しは適切な肉眼診断を行った後、最も病態を反映する部分を標本にすることを目的とした重要な過程である。また、切り出しには病変の観察のほか、臨床情報も重要であり十分な臨床情報の記載が望まれる。切り出した組織は30x25mmのカセット内に収まる大きさに分割し適切な個数を作成する。切り出しは各種癌の取り扱い規約に準じて行うことが推奨されている。次いで、標本の脱水・脱脂、脱アルコール、パラフィン浸透（組織に薄切可能な硬度を与えるためにパラフィンをしみ込ませる）を検体前処理装置にて行うが、この過程に18時間の時間を要する。パラフィン浸透した組織は包埋処理され、パラフィンブロックが作成される。その後、約3μmの厚さで薄切され、プレパレート（未染色標本）が作成

される。最終的に未染色標本にHE染色、必要に応じて、各種特殊染色や免疫染色が行われ病理診断医のもとに届けられる。通常生検検体は提出から標本作成完了まで2～3日、手術検体は切り出しや標本数の多少によって1週間から10日程要する。

●病理診断から依頼者への報告

作製された標本は病理診断医より病理診断が行われる。生検は報告書の提出まで4日前後、手術標本は10～14日である。診断困難な症例や特殊染色が必要な症例については診断確定までにさらに時間を要する。

標本の提出方法を含め標本作製から病理診断医の鏡検に至るまでの過程を紹介した。病理標本の作成には多くの過程があり、標本作製から診断にかかる時間を踏まえ病理診断を依頼することが適切かつ円滑な医療を行うために必要である。

図. 検体の標本作成の流れ

